

書評

日本のニートは国際開発の仕事に向いているか？

中野幸紀

関西学院総合政策学部教授

pha (ファ) 著, 「ニートの歩き方」、技術評論社、2012 年

2012 年 10 月、表題の「ニートの歩き方」を mixi 友の「つぶやき」で見つけた。著者は pha (ファ)。ソフト、ネットワークなどの技術出版で定評のある技術評論社が出している。

そもそも「ニート」とは何かをよく知らないけれど、まわりの若い学生諸君を観察していると、せっかく就職しても 3 年以内に離職する若者が増えているなどと聞く。なるほど、この本のカバー裏面に掲載されている「ニート・チェックシート」にたくさんの〇がつくような若者もたくさんいるらしい。

読んでみて驚いた。学術書とは言わないが、データなどの出典がきちんと記載されているだけでなく、関連文献の紹介などもちゃんと行われている。例えば、「人間は世代に規定される (p.225~226)」という話題が紹介されているページでは、その原著がケヴィン・ケリーという人の「Everything That Doesn't Work Yet」だと紹介されている。人間は 30 才までに経験したことが残りの人生を決め、30 才以降に出会ったことにはまず反発するという主張である。確かに、デジタル・ネイティブの出現だけでなく、国際開発問題などに熱心に取り組もうとする若者も 30 才までに何を経験したかで決まってしまうようなところがある。うなずけるところだ。

全体は 4 章立てだ。第 1 章「ニートのネットワーク — 僕がニートになった理由」、第 2 章「ニートの日常風景 — コミュニティとゆるい生活」、第 3 章「ニートの暮らし方 — ネット時代の節約生活法」、第 4 章「ニートのこれから — 社会・人間・インターネット」となっている。しかし、章立てにあまり意味はなさそうだ。どこから読み始めても面白く読める。というより、頭から尻尾まで順序立てて読むより、ぱっと開いたところを読み飛ばすという新書本的な項目立てになっている。ホームで電車待ちをしている数分間だけでボスキャラを倒せるソーシャル・ゲームみたいなものだ。

さて、SRID 会員諸氏にこの pha の本を紹介しようと思いついたのは、次の 2 つの仮説を一緒に考えて欲しいと思ったからである。

(1) 途上国の人達はニートである。

(2)日本のニートが国際開発の最前線に立つことが可能だ。これらの仮説をこの誌面を借りて少し検討してみよう。

著者は、2009年のある日から西アフリカのブルキナファソに行きはじめた。2003年にITU-Rがメンバー国に勧告した「アマチュア無線の途上国への普及」という呼び掛けに応じて大学間国際研究協力拠点を構築しようと思いついたことが表向きの理由である。実際には、ENA時代の同級生たちが、つぎつぎにフランス語圏西アフリカなどに大使で赴任していたり、EU代表として西アフリカ援助政策などを担当する年齢になっていて、彼らに会いに行く口実作りだったのかも知れない。

pha自身も東南アジアで一時期生活をしていたなどを書いていて、ところどころにタイとかマレーシアなどの話が紹介されている。例えば、本書の「はじめに」にも「それでも東南アジアの発展途上国なんかと比べてみると、やっぱり日本はまだまだ恵まれているほうだと思う。(p.8, l.11)」と書かれているし、そのすぐ後ろの3ページを使って「メキシコの漁師の生き方」が紹介されている。アメリカ人旅行者が地元の漁師と対話する形式で語られる笑い話だ。いわく、都会に出て効率よく金儲けして、年取って、結局どうなるの？メキシコの漁師が若い頃からフツーに過ごしている田舎生活のレベルを手に入れることができるだけだよ。それが人生最大の目標だったりする。そんなんでいいの？などと考えさせるよくできた小咄である。

p.235にはタイの話が出てくる。phaは、タイではコンビニの店員が無駄話をしながらテキトーに働いている、それに引き替え日本だとぎりぎりの数の店員が終日忙しそうに働いていると指摘している。途上国では家族の中に働いていない人がいても働き者が彼らを養っていて、家族のような小さいコミュニティの中で、働いている人が働いてない人を支えることがフツーなのだと。働いてないことをだれも怪しまない社会だとも指摘している。

phaは「働かないもの食うべからず」という言葉は明治期に日本に持ち込まれた外来思想で、いちばんきれいな言葉だと公言している。働きたくないときに働かないのが本来の人間のあり方で、電車が時刻どおりに来なくても、コンビニが24時間やってなくても特段に困らないと。

確かに、先進国であるはずの西欧社会でも電車は時刻表どおりに走っていないし、テレビの朝のニュース番組も時刻表どおりに始まることもない。フランスだと、テレビ放送の男女のアナウンサーがお互いにふざけあっていたりするのもフツーだし、市営バスの運転手がテキトーな服装でテキトーに運転していてもだれも怪しまない。

こうして見てくると、第1の仮説として提示した「途上国の人達はニートである。」がなんとなく受け入れられそうな気がしてくる。先進西洋諸国の人達もかなりニートな人達なんではなかろうかということになる。フランスの若者失業率が23%を超えているなどという数値を見ても驚かなくなる(笑)。

だとすれば、日本社会というのはphaに言われるまでもなく、「かなりヘン」な社会で、途上国社会から一番遠いところにあるのではないか。そんな会社人間が途上国に行くとどうなるか？メキシコの漁師と対話するアメリカ人旅行者と同じじゃないか？それでは対話と相互理解がそもそもなりたちそうもない。

では、日本の国際開発政策はどうあるべきか？

答は、このphaの本に書かれている「GEEK(オタク)」で、「NEET(定職ついていない)」な若者達に国際開発に興味を持ってもらうことではなかろうか。彼らであれば対話も相互理解もOKのような気がするから。これで、第2の仮説「日本のニートが国際開発の最前線に立つことが可能だ。」も蓋然性がありそうな気がしてくる。

phaはNHKのテレビにも出たそう(p.130)。この本を出版したのだからすでにフリーランスとしてはメジャーだ。彼に「ニートよ、パソコンを持って途上国に行こう。」などと呼び掛けてもらえれば、最近の若者達の海外離れといった社会現象も逆転させることができるかも知れない。

みなさんご自身の「ニート傾向」もこの本の裏カバーに掲げられている「チェックシート」で確認してみよう。まわりの若者にやってもらって高得点であれば即途上国要員という人事管理も可能かも(あ、ジョウダンです)。みなさんの参考のために、チェック項目を少し言葉を変えて再掲しておこう。

「学校に来るのがつらい、満員電車(バス)に耐えられない、朝起きられない、勉強していないことに後ろめたさがない、ひとりぼっちが好き、インターネットにはまっている、お金をかけないオタク趣味に没頭している、貧乏の本当の意味がわかってない、部屋はごみだらけ、家賃は払ってない、身体は頑丈、料理OK、友人がいっぱい、実家が金持ちで生活に不自由してない、異性を口説き倒すのが趣味、結婚には興味がない。」

やっぱり、日本のニートは途上国要員には向いてないかしら。